

崇徳会研究・研修センター便り第6号

「研究を通して看護を振り返る」(2025/9/22)

田宮病院 看護部 8病棟 青野 巧

今まで精神科分野の看護研究を読んだことがなく、どんなテーマの研究があるのかも分からない中で今回研究を行う事となった。自分にできるのだからと不安は強かったが、まずはテーマについての検討を始めた。8病棟は精神療養病棟であり、その中でも社会復帰支援病棟としての役割を担っており、超職種で円滑な退院支援の実践につなげている。退院支援を行う上で難しいのは、長期入院患者に対する退院支援である。長期入院患者が退院できない要因として先行研究にある「自己効力感の低下、自尊心の低下」というワードに着目し、自己効力感や自尊感情の向上は退院に繋がるのかという仮説を立てて研究に取り組み始めた。

研究介入はストレングスマッピングシートという標準化された様式を用いて行い、患者との対話を行い患者の思いや強みを引き出すという方法を用いた。「患者さんは話してくれるだろうか・・・」という不安はあったが、思いのほか反応がよく今までの悩みや今後の展望など様々なことを話してくれて、「この患者さんってこんな思いを抱えて入院しているんだ。」と患者の新たな一面を見ることができた。介入前は自尊感情のスケール数値が19点であったが、介入後は26点に上昇し、退院に繋がった。自分達の立てた仮説が現実起こった驚きと、なぜこのような事象が起こったのだろうと考察したい気持ちを強くさせる研究であった。

研究を通して今までの看護を振り返ることができた。振り返ってみると、「こんなにゆっくり患者さんと話したことがなかったな」と「患者さんと対話することは効果的なんだな」という思いが浮かんた。8病棟も介護度の高い患者が増え、毎日忙しく、中々患者の話をゆっくり聞くという大切な看護を行えていなかったことに気付かされた。患者がどんなことを考えて入院しているのか把握することで患者の思いやニーズを捉えより個別性をもったケアが提供できることを再確認した。また、自分達が行っている看護は患者にどんな意味をなしているんだろうと懐疑的であったが、今回の研究で自尊感情数値の動きをみて「自分達の看護ってちゃんと意味をなしていたんだ」という自信を持つことができた。

最後に、長岡崇徳大学の板山先生のご指導の元、研究の基礎や面白さを学ぶことできた。ご指導くださった板山先生、研究の時間を確保してくれた病棟スタッフに感謝申し上げます。